
イルカに降る雪

葵一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イルカに降る雪

【Nコード】

N6514Y

【作者名】

葵一樹

【あらすじ】

彼と大喧嘩して一人ハワイに旅立った「あたし」。
奇しくもクリスマスイブに見つけたものとは。

バルコニーの白いガーデンチェアに腰かけ、あたしは大きくため息をついた。

見上げればどこまでも晴れ渡った青い空。眼下に広がる白い砂浜。空との境界線まで続く、エメラルドグリーンの海。

ビーチを行きかう人々の雑多な言語や笑い声が五階のテラスまで届く。ホテルの向かい側にあるショッピングモールからは、日本人にも馴染みのあるメロディが鐘の音と共に風に乗って運ばれてきた。嫌味を言われながらもようやく取った年末前の有給休暇。吹雪が止まない地元から逃げるように、イブにハワイへ直行したあたしにとってこの旅行はココロ踊るバカンスのはずだったのに。

「……たく。なーんでハワイ人は商売っ気がないかなあ」

常夏の島でマリンスポーツにショッピングに遊びまくるぞ、と意気込んできたというのに。いざワイキキビーチに着いてみれば、ガイドブックに書かれたお店のどこもかしこもクローズの札がかかっているのだ。

聞けばクリスマス休暇でイブの午後やクリスマス当日はクローズのお店が多いとか。お店側も従業員にクリスマスボーナスを払うより、休みにしちゃったほうがいいらしい。

「日本でイブって言ったら、ブランドショップもデパートも稼ぎ時じゃんっ」

唯一の楽しみが奪われて、あたしは裸足のまま軽くバルコニーの手すりを蹴飛ばす真似をする。すると、つんと当たった拍子に、爪のラインストーンが外れて下に落ちてしまった。

ツイてない。

いや、思えば去年にこの旅行を企画したときから、あたしはツイてないことばかりだ。

まず昇進試験に落ちた。上司の犬に噛まれた。ピアスホールがか

ぶれた。そして風邪をひいてパスポートの更新にいけず、新規で取得し直した。

そして二ヶ月前。旅行の前金を払った直後、彼と大喧嘩をした。

きっかけなんてもう忘れてしまうほどに些細なこと。でもお互いにヒートアップして、怒鳴りあいが止まらなくなった。結果、どちらからも折れることのないまま、今日のクリスマスイブを迎えることになってしまったのだ。

あたしは頬につけた左手を少し浮かせ、親指で薬指の根元を探った。でも何もない。手の平との境にある僅かなへこみが、数日前までそこにモノが存在していたことを無言で示しているみたいだった。ふわりと風が舞った。下ろした髪が頬を軽く叩いていく。遮るものがなくなったせいか、そよそよと吹く乾いた風を薬指が敏感に捉えているのが分かった。

十二月も下旬のハワイ。日差しは突き刺すように強いものの、日陰を通る風は穏やかで時に肌寒ささえ感じることがあるなんてはじめて知った。タンクトップから出た肩に当たる風より、左手を掠めるそれはずっと冷たい。

えいっとあたしは声を上げて立ち上がった。

こうしていても仕方ない。到着してから何も食べていないから寒いんだ。腹ごしらえができるお店を探しに行かなくちゃ。

エレベーターを降りてフロントの前を通り過ぎるとき、甘ったるいフルーティな香りがあたしの鼻を直撃した。人の動きに合わせてまわりついてくるそれは、空気を重くするほどの甘さで、鼻腔を抜けて胸の奥や頭の芯までくらくらしそうだ。

空港を降りたときもそうだったっけ、とあたしはちよっただけ息を止めてその場を通り過ぎる。

香水はキライじゃない。けどやっぱりあたしはべたべたに絡みつく香りよりほのかに漂うくらいの方が好きだった。

彼も。

甘ったるい匂いから逃げたくて、あたしは記憶の中で彼の匂いを

探した。でもどうしてだろう。上手く思い出せない。ずっと吹いてくる風があたしの左手を撫でる。ひんやりした感触が腕を這い登った。

早足でしきりのないエントランスからホテルの外へと出る。さすがにワイキキのビーチ。有名店は軒並みクローズだったけどビーチに面したお店は大丈夫そうだ。

開いているのはどれも小さなお土産やさんとファーストフード店で、店番のおじさんやおばさんがカタコトの日本語で話しかけてくる。値札もドルと円の二重表記。

そんな個人商店を物色しながらビーチに目を向ける。波うち際にはたくさんの人が、それこそいろんな肌や髪の色をした人たちが楽しそうに水遊びに興じていた。

まだ足元がおぼつかない幼児を抱えたファミリー。見るからに日本人と分かるホスト風の男とその彼女。白い砂浜で真っ赤に肌を焼いている中年のオバサン。ヒゲを生やしたオジサンとちよつとマツチヨな若者が顔を寄せ合ってひそひそ話しているのも見える。

じりじり焦げ付くような日差しの下だけどもみんな笑顔で、その中であたし一人だけがぼんやりしているみたい。

この旅行だって、本当なら彼と二人で来るはずだった。ちよつとしたメモ事はあったけど順風満帆に付き合ってきたつもりだったし、毎年の冬に行っていたスキーを無理やりハワイに変更したこの旅行だって、結婚を視野にいれていたことだった。

冬になると三度の飯よりスキーが良い、という彼もいよいよ結婚式をと考え始めてくれた矢先だったのに。

喧嘩の翌日、旅行会社から彼がキャンセルしたと聞かされて、あたしは意地になって旅行を強行した。

「つまんないの」

意地になって一人で来てはみたものの、やっぱりむなしさだけがかみ上げる。

沈んだ自分を引き上げるためにも、何かばあつと浪費しよう。こ

うなったらチープなものでもなんでもいいから買い物してストレス発散しよう。

手っ取り早く一番近くにあったお土産やさんに入ると、奥にいたおじさんがニコニコしながら出てきた。別にどれを買うとも何も言っていないのに、コレは一ドル、コレは二百エン、などと日本語で話しかけてくる。あたしは断るのも面倒くさくなって、適当に相づちを打ちながらざっと店内を見渡した。

ウクレレ、ムームー、木彫りのマスコット、ハワイアンジュエリー、椰子の皮製のストラップなど、雑多な品物が所狭しと置いてある。どれもこれも、いかにもハワイ。購買欲が湧かない。

「えくすきゅーず、み……」

出よう、としたそのときだった。お店の棚の一角に、きらりと光るものを見つけたあたしの口が止まった。

スノードームだ。

ハワイでスノードーム。なんともミスマッチな気がして、あたしはその中の一つに手を伸ばした。

波と戯れるイルカと、その周りに何故かパイナップルとかパパイヤとかの果物があつて、それ全体をガラスの球体が覆っている。そつと手に取ってひっくり返すと、中に沈んでいたラメがきらきらと水中を踊り始めた。

手の平に載せてあたしはじつとスノードームを見つめた。透明な球体の中の世界は、光が差し込む水中でイルカが泳いでいるようにも見えたし、水面に躍り出たイルカが舞い散る雪に戯れているようにも見える。

イルカの表情はどこまでも楽しく朗らかで、その目はどこことなく彼に似ていた。彼がスキーの話をしているとき、スキー場で風のように滑り降りているときのそんな目。

ふいに雪の匂いがした。

いや、それは気のせいだったのかもしれない。乾燥した風に含まれるのは、ホテルや空港で嗅いだのと同じく甘い香りだ。湿って重

たい、空中の埃と水分が混じったような、あんな匂いがするわけがないのに。

でも確かにあたしの鼻の奥は、雪国で慣れ親しんだ初雪の匂いを捕まえていた。その匂いの記憶は南国の匂いに麻痺していたあたしの脳を揺さぶって、初めて嗅いだ彼の匂いをも強烈に思い出させる。念入りに手を洗ったらしい石鹸の匂いと、少し焦げっぽい、灯油ストーブを焚いた匂い。それにほんのちよっぴり混ざったお味噌汁の匂い。

ああ、そうだった。

「ソレ十一ドル。十ドルデイヨ」

ぼうつとスノードームを持ったままのあたしに、おじさんがニコニコと話しかけてきた。

あたしはバッグから十ドル札を出すと、おじさんにそのまま手渡した。包むかと聞くおじさんに首を振り、両手でスノードームを抱えたまま店を出る。アスファルトに炙られた風があたしの指先を撫でた。指輪をはずした薬指の音がはつきり聞こえる。

あたしはバッグの中から小さなポーチを取り出し開けた。ところどころ黒ずんでいるけど銀色に光る指輪を手の平に載せる。それを今にも暴れだしそうな薬指にはめた。ずしりと重い。けど心細さは消える。

「ハワイと日本の時差って、何時間だっけ」

携帯電話を開くとディスプレイに示される時刻は朝の六時。イブじゃない。二十五日、クリスマスだ。

クリスマスの朝は特別だもんね。

あたしは寝起きで不機嫌な彼の声を想像しながら、彼の番号を一つ一つ押していく。電話が繋がったら何を話そう。何を伝えよう。怒られるだろうから、まずは謝るところから始めようか。

街に流れるクリスマスソングに後押しされるように、あたしは最後のボタンを押した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6514y/>

イルカに降る雪

2011年11月20日05時42分発行